

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

国際インターンシップと英語プレゼンテーション能力の育成：マレーシアの工場における実験と経験

著者	洞口 治夫, 児玉 靖司, 行本 勢基
出版者	法政大学イノベーション・マネジメント研究センター
雑誌名	イノベーション・マネジメント
巻	12
ページ	175-200
発行年	2015-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10114/12287

<資料>

国際インターンシップと英語プレゼンテーション能力の育成 —マレーシアの工場における実験と経験—

洞口治夫
児玉靖司
行本勢基

1. はじめに

本稿の目的は、筆者らが組織した短期国際インターンシップにおける参加者の動向を記録し、その教育的な効果を可能な限り定量的に評価することにある。筆者らは、2014年8月9日から23日までマレーシアにおいて短期の国際インターンシップを企画した。19名の大学生参加者と受け入れ先となったマレーシア現地企業の協力を受けながら、参加学生の動向をインターネット・サイトに記録するとともに、現場で観察し、そのデータを集計した。これは、経営学教育についての一つの試みである。

国際インターンシップを中心として、いくつかの課題が放射線状に連結している。第一は、集合知形成についての実態観察の試みである。集合知とは、集団の生み出す知識と定義できる¹。少数の専門家による専門的知識の移転ではなく、いわば素人の参加によって集合知が形成されるか。それは、どのようなメカニズムで成立していくのか。大学生という素人が、国際インターンシップを通じて、企業で働くプロフェッショナルであるマネージャーたちに、なんらかの意味ある提言をすることができるか。筆者らと、企業のマネージャーが予想した水準を超えた優れた提言をすることができるか。こうした点を観察することが本研究の目的である。

第二は、実験経済学²に対応した研究手法として実験経営学を再構築できるか、という問題意識がある。実験経済学に比較して実験経営学という呼称にはなじみが薄いだが、ホーソン実験³にさかのぼれば、経営学における「実験」が先行してきたといえる側面もある。「再」構築というのは、そのような意味においてである。19名の大学生がどのような行動をとるかを仔細に観察し、そこから発見される事実を提示したい。

第三は、受入先となったマレーシアの工場管理に対してアクション・リサーチを行うこ

¹ 洞口（2009）、洞口（Horaguchi 2014）を参照されたい。

² 行動経済学の文献サーベイとして友野（2006）を参照されたい。

³ メイヨー（Mayo 1933）を参照されたい。

とである⁴。参与観察が現場変更を最小限に留める意図をもって行われるのに対して、アクション・リサーチは、現場の改編をいわずに調査を進めるものである⁵。第一の問題意識である集合知形成の結果をマレーシアの工場マネージャーたちが有益なものとして受け入れれば、それは現場の改編につながる。

第四は、大学生への教育方法としての国際インターンシップである。これは、教育・看護・保育などの教育現場で用いられている用語法としてのアクション・リサーチと同義である。上記第一から第三までの問題意識が社会学者としてのものであるとするならば、この第四の問題意識は、筆者らの教育者としての課題である。日本の大学では単位認定を行う短期・長期の留学プログラムを標準的なカリキュラムとして準備してきた。国際インターンシップについても、急速に広まりをみせている。留学も、国際インターンシップも、「何か良いこと」として学生にも、教師にも、また保護者にも認識されているようであるが、実際に「何が良いのか」についての記録は少ない。

日本の文部科学省は、スーパーグローバル・ユニバーシティといった国際化推進プログラムにおいて大学選別を進めており⁶、巨額予算を獲得した主要大学は、今後、国際インターンシップを強力に押し進めていくことになるであろう。本稿は、国際インターンシップの効用について、筆者らの集めたデータ・資料を整理し、本格的な解析に向けての実証的根拠を明らかにするものである⁷。

2. 研究方法

2.1 データ収集の方法

筆者ら3名は、2014年8月9日から23日まで19名の大学生が参加する国際インターンシップを企画し、その動向を把握した。その際、主としてウェブを利用したアンケートをとることを目的として、米国インストラクチャー (Instructure) 社が提供するオープンソース LMS (Learning Management System) であるカンバス (Canvas) と、米国グーグル (Google) 社が提供するグーグル・アプス (Google Apps) を組み合わせた情報システムを準備した。参加学生は持参したパソコン (PC) から Canvas にアクセスし、そこに彼らの持参した PC (または iPad などのタブレット端末等) から日誌やアンケートの回答を入力した。Canvas に掲げられた記載項目は、①日誌、②感想、③アンケートに大別できる。アンケートの質問項目は、筆者らが作成して Canvas にアップロードした (図1参照)。

Canvas や Google Apps は、無料でインターネット上に提供されており、資料提示や日誌の入力、アンケートの実施などができる。今回の国際インターンシップでは2つの大学の学生が参加しており、①広く一般に安価に使うことができる情報システムを採用することで将来の研究に役立てること、②Google Apps のフォーム機能を用いて自由にアンケート

⁴ 英文学術雑誌としては *Action Research*, *Educational Action Research* があり、様々な研究結果を報告する場となっている。

⁵ 洞口 (2012) を参照されたい。

⁶ 2014年9月27日、読売新聞朝刊37ページ「世界と競える37大学選定『スーパーグローバル大』」を参照されたい。記事確認は『ヨミダス歴史館』によって行った。

⁷ 国際インターンシップについての研究・実践記録の文献サーベイは、別稿に譲る。

項目を設定する必要があったこと等の理由から、これらのシステムを利用した。日誌、感想などの記載欄を構築する作業も、フォーム機能のアンケート項目を設定することで簡単に実現した。例えば、フォーム機能のアンケート項目でラジオボタンを用いたアンケート項目を設定し、学生に回答をさせると図2のように簡単に円グラフで結果を表示できる。日誌、感想の記入欄は毎日設けられており、参加学生は記載を促された。アンケートは全12回行い、その期日は本稿末尾の付表1に示すとおりである。大幅に回答が遅れる学生もいたが、筆者らから投稿を促すメールを出し、結果としては参加学生全員が回答をした。

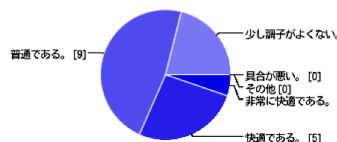
図1 マレーシア・インターンシップ (by Canvas) のホームページ



(出所) 筆者らの作成した Canvas 上のサイトより引用。

図2 円グラフとある学生による日誌の例

本日の調子はいかがでしたでしょうか？



非常に快適である。	1	5%
快適である。	5	26%
普通である。	9	47%
少し調子がよくない。	4	21%
具合が悪い。	0	0%
その他	0	0%

本日の日誌

朝、8時10分にホテルを出発し昨日の続きでインターンをした。午前中3時間、午後3時間のタイムテーブルで二箇所回った。そのあとミーティングで来週の予定と部屋割などを確認した。

8:10ホテルのロビー集合→8:30会議室にて、QC/QAの情報共有→9:00射出成型部門でのインターン→12:30昼食→13:50他のグループとの情報交換→14:30QC/QAでインターン→17:30インターンオートマシンの、セミオートマシンの回った。基本的にはバリ取りが主な仕事内容で、扇風機のタイマーのつまみ、スタンドファンの台をだった。途中に20分休憩があり、ローProcess Quality Control, FQC(Final Quality Control)の三段階に分かれており、それぞれの主な仕事について説明を受けた。IQCはassembly lineに入る前に行われる検査で、KHINDが作っている時間向かい、主に目視にて確認をする。FQCはAssembly lineと連携し、総合的な検査を行う。

6:45 起床 ↓ 7:15 朝食 ↓ 8:10 集合、ミーティング ↓ 8:30 ミーティング終了 ↓ 9:15 グループワーク開始「Ware house」 ↓ 12:30 終了 ↓ 12:30~13:45 昼食、休憩、ミーティング ↓ 14:八時半からミーティングを行いチームごとに作業の内容を全員で共有した。九時からQA,QCの担当でIQC、IPQC、FQCの順番で検査の過程を見学した。十三時十五分に作業を終了し十四時に退社を行った。

(出所) 筆者らの作成した Canvas 上のサイトより引用。

2.2 参加者の特徴

国際インターンシップに参加する学生は、筆者らの奉職する法政大学経営学部と神奈川大学経営学部の19名である。学年別の内訳は、神奈川大学の2年生7名、3年生2名、4年生2名である。法政大学からは2年生3名、3年生4名、4年生1名であった。日本に居住しておりマレーシアに筆者らと共に向かった学生は神奈川大学4名、法政大学8名の12名である。そのほかに神奈川大学の海外留学プログラムによってマレーシアに4カ月滞在していた学生が7名おり、彼ら・彼女らはケダ州のAIMST大学ファウンデーション・コースに所属する日本人留学生でもあった。参加者は、全員が日本国籍である。

ゼミへの所属別には、法政大学経営学部洞口ゼミナールに所属する学生6名、法政大学経営学部児玉ゼミナールに所属する学生2名、神奈川大学経営学部行本ゼミナールに所属する学生4名であり、その合計は12名である。AIMST大学ファウンデーション・コースに所属する日本人留学生7名は全員2年生であり、ゼミには所属していない。この7名のマレーシア滞在経験をもつ学生を含めたのは、属性データとして重要であり、比較対象となるからである。参加学生のうち12名が男子学生であり、7名が女子学生であった。女子学生のうち6名が神奈川大学、1名が法政大学からの参加であった。6名の神奈川大学女子学生のうち2名が日本から参加、4名はマレーシア滞在中の学生であった。

大手進学予備校の偏差値を参照すると、河合塾では法政大学経営学部57.5、神奈川大学経営学部42.5、代々木ゼミナールでは法政大学経営学部60、神奈川大学経営学部51となっている⁸。偏差値は平均を50、標準偏差を10とする成績評価方法であるから、参加学生は、高校時代の基礎学力の意味では、平均値から上下1標準偏差を超えない範囲の学生が主体である。標準正規分布を仮定すれば、母集団のうちの約68パーセントが該当する層であることになる。集合知形成については、少数の専門家による専門的知識の移転ではなく、素人の参加による点が重要であり、その意味で参加学生は実験の条件を満たしている。

2.3 マレーシア企業の特徴

国際インターンシップの受入先となったマレーシア企業は、マレーシアの株式市場に上場する会社であり、グループ会社19社をかかえている。2013年のグループ全体での売上高が3億2500万リンギ（日本円で約100億円）、従業員数約800名である。国際インターンシップを行ったのはクアラルンプール近郊のシャーアラムにあるオフィスとクアラルンプールから1時間半ほど北部に向かったスキンチャン村の工場（以下、スキンチャン工場と略記）⁹である。同工場には約430名の従業員がいる。同工場の主要な生産品目は扇風機、非常用ライト、調理用ミキサーなどである。

受入先となったマレーシア企業による自社グループ内部での生産比率は30%であり、残りはすべてOEM生産となっている。したがって販売品目の70%程度については、製品の輸入と第三国向け輸出を行っている。売上高の約6割はマレーシア国内であり、残る比率

⁸ 両大学の偏差値については、河合塾と代々木ゼミナールのホームページを参照した。河合塾「入試難易予想ランキング表」<http://www.keinet.ne.jp/rank/15/ds03.pdf>、および、代々木ゼミナール「大学難易ランキング」<http://www.yozemi.ac.jp/rank/daigakubetsu/index.html>）であり、2015年1月26日に確認した。

⁹ 同工場の正式名称は別にある。

が海外市場向けである。UAE、サウジアラビアなど中東諸国への輸出が中心であり、ドバイに同社の販売事務所が設立されている。2011年にはオーストラリアの扇風機メーカーを買収し、自社ブランドと共に被買収企業のブランド名で扇風機を製造販売している。家電製品の他、産業機器の販売も手掛けており、欧米の有名企業とも販売代理契約も結んでいる。

同社の創業は1961年であり、自転車用ライトやバッテリー、ラジオなどの家電製品の修理業務から創業した。いわば家内工業のような形で現会長が創業し、1987年には現会長の息子である現社長が入社した。当時の売上高は約400万リンギ（日本円で約1200万円）であった。現社長の入社後、徐々に企業としてのブランド構築を試みるようになり、1990年代以降、創業者家族以外のマネージャー層を採用して近代的な経営手法を導入してきた。その結果、1999年には売上高が7800万リンギとなり、マレーシアの株式市場への上場も果たしている。

学生と筆者らは、同社の創業の地で運営されているスキンチャン工場で10日間の受け入れを許可された。工場から徒歩5分のホテルに滞在して毎日徒歩で通勤した。以下、この企業を国際インターンシップの「受入先企業」と呼ぶ。受入先企業との事前打ち合わせによって確定した予定は、本論文末に掲げた付表2のとおりである。日程には、マレーシアで操業する主要な日系企業であるS社とP社の両社への工場見学と、両社で行われた英語および日本語でのプレゼンテーションを含んでいる。参加学生およびマレーシア受入先企業には、英語の予定表を配付した。なお、参加学生用には英語に加えて日本語の一部翻訳をつけた予定表も配付した。

3. 調査結果

3.1 事前の英語力

参加学生には、参加時点での英語力についていくつかの質問を行った。第一は、「あなたは、英語が得意ですか」というものであり、「はい」と答えた学生は3名、15.8%にすぎなかった（表1参照）。「あなたがTOEICで獲得した最高の点数を教えてください」という質問では、未受験者が11名おり、受験経験者は8名にすぎなかった。TOEICで700点を超えているのは2名、600点から699点までの点数を獲得している学生は3名であった（表2参照）。以上を要するに、参加学生の大半は英語が得意ではないと自己認識しており、英語力検定試験で高い得点を獲得した学生ではなかった。

表1 「あなたは、英語が得意ですか」という質問への回答結果

	人数（人）	%
はい	3	15.8
いいえ	16	84.2

（出所）第1回アンケートより作成。

表2 「あなたがTOEICで獲得した最高の点数を教えてください」という質問への回答結果

点数	法政	神奈川
700 点以上	2	0
600 点以上	2	1
500 点以上	0	0
400 点以上	1	2
未受験	3	8
合計	8	11

(出所) 第1回アンケートより作成。

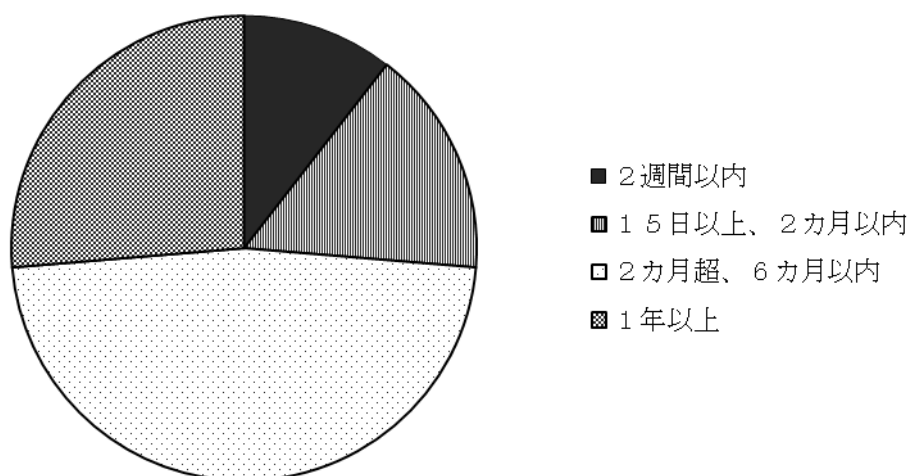
「今までの外国での滞在日数を合計すると、どのくらいですか」という質問には、表3のような回答が得られた。2週間以内という学生が2名、15日以上2カ月以内という学生が3名であり、海外滞在経験が短い学生は5名であった。2カ月以上6カ月以内の学生は9名であったが、これはマレーシア留学中の学生が7名おり、彼ら・彼女らが2014年4月から調査期間中の8月まで海外に滞在していたことによる。1年以上の海外滞在経験を持つ学生も5名いた。図3に明らかなように、海外滞在経験が2週間以内の学生、1年以上の学生、その中間の学生は、きれいにバランスしていた。

表3 「今までの外国での滞在日数を合計すると、どのくらいですか」という質問への回答結果

2週間以内	15日以上 2カ月以内	2カ月超、 6カ月以内	1年以上
2	3	9	5

(出所) 第1回アンケートより作成。

図3 「今までの外国での滞在日数を合計すると、どのくらいですか」という質問への回答結果



(出所) 第1回アンケートより作成。

3.2 英語力への影響

短期インターンシップ期間中に英語理解度の自己評価をアンケート質問項目で尋ねた。いわば受動的な意味での理解度調査である。その結果を比較したのが、表4である。

第一の質問は、「あなたは、8月11日に見学したS社での英語プレゼンテーションは、何パーセント程度理解できましたか」というものであり、選択肢は、90～100%、80～89%、70～79%、60～69%、50～59%、40～49%、30～39%、0～29%であった。この質問は、8月12日に日系企業S社エアコンディショニングへの訪問プログラム終了後、第2回のアンケートにおいて行った。

第二の質問は、同じく8月12日のプログラム終了後、第2回のアンケートにおいて「あなたは、8月12日に訪問した「受入先企業」での英語プレゼンテーションを、何パーセント程度理解できましたか」と尋ねたものである。選択肢は上記と同じである。

第三の質問は、8月21日に掲示した第8回アンケートにおいて「あなたは、8月20日水曜日、受入先企業スキンチャン工場での英語プレゼンテーションを何パーセントくらい理解できましたか」と尋ねたものである。選択肢は上記と同じである。8月22日に最終プレゼンテーションを控えていたことから、学生がこの質問に回答したのは8月23日および24日であった（本論文末、付表1参照）。

これら3つの質問によって、10日間という短期間における英語でのプレゼンテーションや会話といった集中的な体験が、英語の理解度にどのような影響を与えたかをみたのが表4である。8月20日におけるプレゼンテーションの理解度を中心として、その前に行われた11日および12日の回答状況を比較した結果である。8月11日、12日には「8割以上理解している」と回答した学生がいたが、そうした学生が最終的にはいなくなっており、7割以上理解したと回答した学生も2名だけになっている。その一方で、3割未満しか理解できなかったと回答した学生もいなくなっている。8月20日には、英語プレゼンテーションの内容を5割から6割程度理解したと判断した学生が増えている。

表4には、8月11日時点を基準として20日時点での理解度水準が変化した度合いについて1ポイント、また、12日時点を基準として20日時点で理解度水準が変化した度合いについて1ポイントを付与した結果を示している。たとえば、学生番号6の学生は8月11日時点で企業で行われた英語プレゼンテーションについては40～49%理解できたと回答しているが、20日には30～39%程度理解したと回答している。したがって、この変化は「下降」に分類されて1と評価される。この学生番号6の学生は、12日時点では0～29%の理解度を自己認識しており、この水準と20日の水準である30～39%程度とを比較すると、「上昇」に分類される。よってこの評価は「上昇」1となる。

このように採点した評価結果をすべての学生について合計すると、「上昇」が15ポイント、「不変」が12ポイント、「下降」が9ポイントであった。「上昇」が「下降」を6ポイント上回るが、統計的な検定をかけることのできるデータ数や分布ではないため、確定的な結論を導くことはできない。すなわち10日間程度の英語学習期間の場合、「よくわかるようになった」と自己認識する学生と、「あまり変化がなかった」と考える学生、「かえってわからなくなった」と認識する学生とが混在することになる。8月11日ないし12日での理解度と20日の理解度とを比較して「上昇」を記録した15ポイントについて、学

表4 英語プレゼンテーション理解度の自己認識

学生 番号	8月11日 X社	8月12日 Y社	8月20日 Y社	上 昇	不 変	下 降	大 学
3	0～29%	0～29%	30～39%	2			H
5	30～39%	30～39%	30～39%		2		H
14	30～39%	30～39%	30～39%		2		K
6	40～49%	0～29%	30～39%	1		1	H
17	40～49%	50～59%	60～69%	2			K
11	50～59%	70～79%	40～49%			2	K
7	50～59%	50～59%	60～69%	2			H
12	50～59%	50～59%	50～59%		2		K
10	50～59%	60～69%	60～69%	1	1		K
18	50～59%	70～79%	n.a.				K
16	50～59%	40～49%	60～69%	2			K
8	50～59%	50～59%	70～79%	2			H
9	60～69%	40～49%	50～59%	1		1	K
1	60～69%	40～49%	60～69%	1	1		H
2	60～69%	50～59%	60～69%	1	1		H
15	70～79%	60～69%	60～69%		1	1	K
19	70～79%	70～79%	60～69%			2	K
4	70～79%	70～79%	70～79%		2		H
13	80～89%	60～69%	50～59%			2	K
				15	12	9	

(注1) 学生番号は他のアンケート項目を整理するための番号である。

(注2) 8月11日の理解度と8月20日の理解度、8月12日の理解度と8月20日の理解度を比較した結果を「上昇」「不変」「下降」によって示した。

(出所) 第2回および第8回アンケートより筆者作成。

生の特徴をみると、そうした学生は11日時点での英語理解度についての自己認識が69パーセント以下と回答した学生であった。

9ポイントの「下降」を記録したのは、6名の学生からの記録結果であった。そのうち5名は神奈川大学の学生であり、女子3名、男子2名であった。1名の法政大学学生は男子であった。この点をさらに検討するために横軸にノート・テイキングをしたページ数を取り、縦軸に8月12日時点の理解度を示したのが図4である。すなわち、「あなたは、8月12日に訪問した受入先企業での英語プレゼンテーションについて、A4版の大きさの紙を基準にしたときに何ページくらいのノートをとりましたか」という質問への回答を横軸に示している。

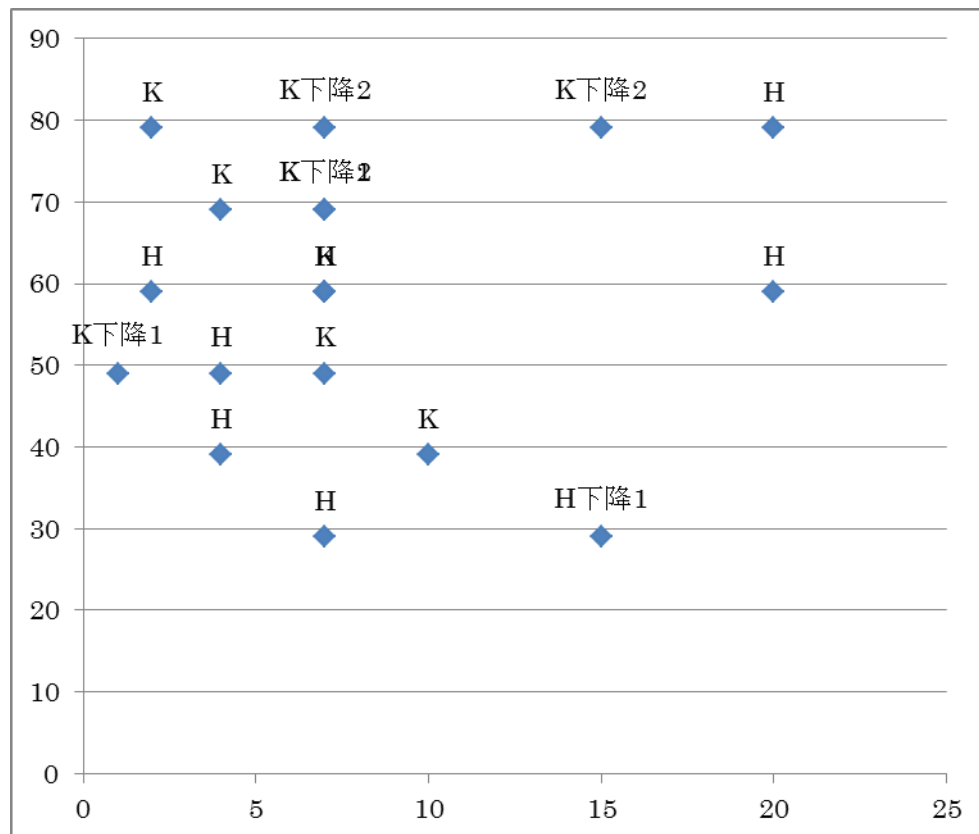
8月12日における受入先企業での英語プレゼンテーションは、午前9時から11時半ごろまで、受入先企業のチョイ（Choi）さんによる「財務状態やバランスシートの解説」、

シー（See）さんによる「代金回収・銀行手続きの解説」、午後1時から4時ごろまで、リム（Lim）さんによる「国際貿易取引やFOB・CIFの解説」、テー（Tee）さんによる「人事労務管理や離職率の解説」、ブライアント（Briant）さん（中国系マレーシア人）による「情報システムやERPの解説」であった。休み時間や昼食休憩が入ったが、合計約5時間程度の英語プレゼンテーションであった。

5時間の英語プレゼンテーションを聞いていた間に学生がとったノートのページ数は図4横軸に示されている（後掲、表7をも参照）。グラフ内の一番左には、「1ページ未満」のノート・テイキングをしたのみであり、かつ、8月20日にはさらに理解度が下がった学生番号9がいるが、この「下降1」に該当するのはこの学生が8月11日に日系企業S社での英語プレゼンテーションを「60～69%」理解したと回答し、20日の理解度として「50～59%」の理解度を選択したためである。

図4 10日間の国際インターンシップののちに英語プレゼンテーションの理解度が低下した学生のノート・テイキング

英語プレゼンテーションの
理解度



ノート・テイキングのページ数

（注）「ノート・テイキングのページ数」と「英語プレゼンテーションの理解度」について、まったく同じ評点を記録した学生が複数いる場合、グラフ内では重複した印字が行われている。「K下降1」と「K加工2」、「K」と「H」が重複して印字されているのは、そのためである。「下降1」ないし「下降2」を記録した学生の総数は6名である。

（出所）筆者作成。

グラフの一番右には、20 ページ以上のノート・テイキングができたと回答した学生が示されているが、その人数は 2 名であった。「10 ページ以上 15 ページ未満」のノート・テイキングをした学生も 2 名いた。そのうち一人は神奈川大学の学生であるので「K 下降 2」と表記されている。これは、8 月 11 日、12 日の両日の理解度が 20 日より高く、日程後半の理解度が下がったことを示している。もう 1 名は法政大学の学生であり「H 下降 1」となっているのは、前半のうちの 1 日についての理解度が 20 日より高く、後半に低下したことを示している。「4 ページ以上 7 ページ未満」のノート・テイキングを行った学生のうち、「K 下降 2」となった者が 2 名、グラフ上の文字が重なっているが「K 下降 1」となっている者が 1 名いる。

8 月 20 日に比較して 11 日、12 日の 2 日間の理解度のほうが高く、20 日になって理解度が下がった学生、すなわち、「下降 2」を記録した学生が 3 名いた。この 3 名は、すべて神奈川大学の学生であり女子 2 名、男子 1 名であった。そうした学生のノート・テイキングは「10 ページ以上 15 ページ未満」が 1 名、「4 ページ以上 7 ページ未満」が 2 名であった。そうした作業量のもとで、2 名が「70～79%」理解し、1 名が「60～69%」理解したと回答していたことになる。これらの学生は、インターンシップ後半になって理解度が低下した。

受入先企業のマネージャーによる英語プレゼンテーションを見ていた学生を観察すると、多くの学生がスマートフォンでパワーポイント・スライドを撮影していた。したがって、スマートフォンには大量の画像データが記録されたはずであるが、その行為によって学生の理解が高まったのか、あるいは、スマートフォンに記録したのちに再度そのスライドの情報を理解しようと試みたかどうかは不明である。

3.3 学生による英語プレゼンテーション

学生には、6 グループに分けた最終英語プレゼンテーションという課題を出した。いわば、能動的な習熟度をみる課題である。19 名の学生を 3 名のチーム 5 つと 4 名のチーム 1 つに分けて、自由なテーマで発表をさせた。表 5 には、英語プレゼンテーションをするのが初めてかと尋ねた質問をまとめたが、質問に対して「はい」と回答したのは 6 名 (31.6%)、「いいえ」と回答した学生は 13 名 (68.4%) であった。

表5 「あなたは、英語でプレゼンテーションをするのは初めてでしょうか」という質問への回答結果。

	人数(人)	%
はい	6	31.6
いいえ	13	68.4

(注) 第 10 回アンケートより作成。

英語プレゼンテーションを終了したのち、それに対する自己評価を尋ねた結果が表 6 および図 5 である。「予想以上にうまくいった」が 1 名、「かなりうまくいった」が 3 名、「ほほううまくいった」が 8 名であり、合計 12 名、63.2%であった。表 1 において「あなたは、英語が得意ですか」に「はい」と回答した学生が 3 名、15.8%、表 5 において「あな

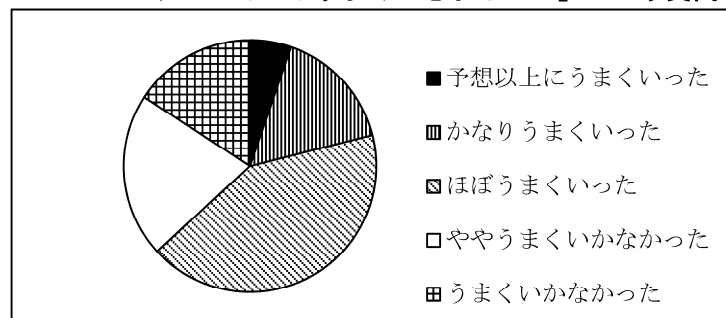
たは、英語でプレゼンテーションをするのは初めてでしょうか」という質問に「はい」と回答した学生が 6 名、31.6%であったことに比較すると高い比率で 63.2%の学生が「ほぼうまくいった」以上の満足度をしめている。逆に、表 3 において「今までの外国での滞在日数を合計すると、どのくらいですか」という質問に対して「2 カ月超」と回答した学生 14 名、73.7%よりは低い数字となっている。

表6 「本日のプレゼンテーションはうまくいきましたか」という質問への回答結果

	人数(人)	%
予想以上にうまくいった	1	5.3
かなりうまくいった	3	15.8
ほぼうまくいった	8	42.1
ややうまくいかなかった	4	21.1
うまくいかなかった	3	15.8

(出所) 第 10 回アンケートより作成。

図5 「本日のプレゼンテーションはうまくいきましたか」という質問への回答結果



(出所) 表 6 に同じ。

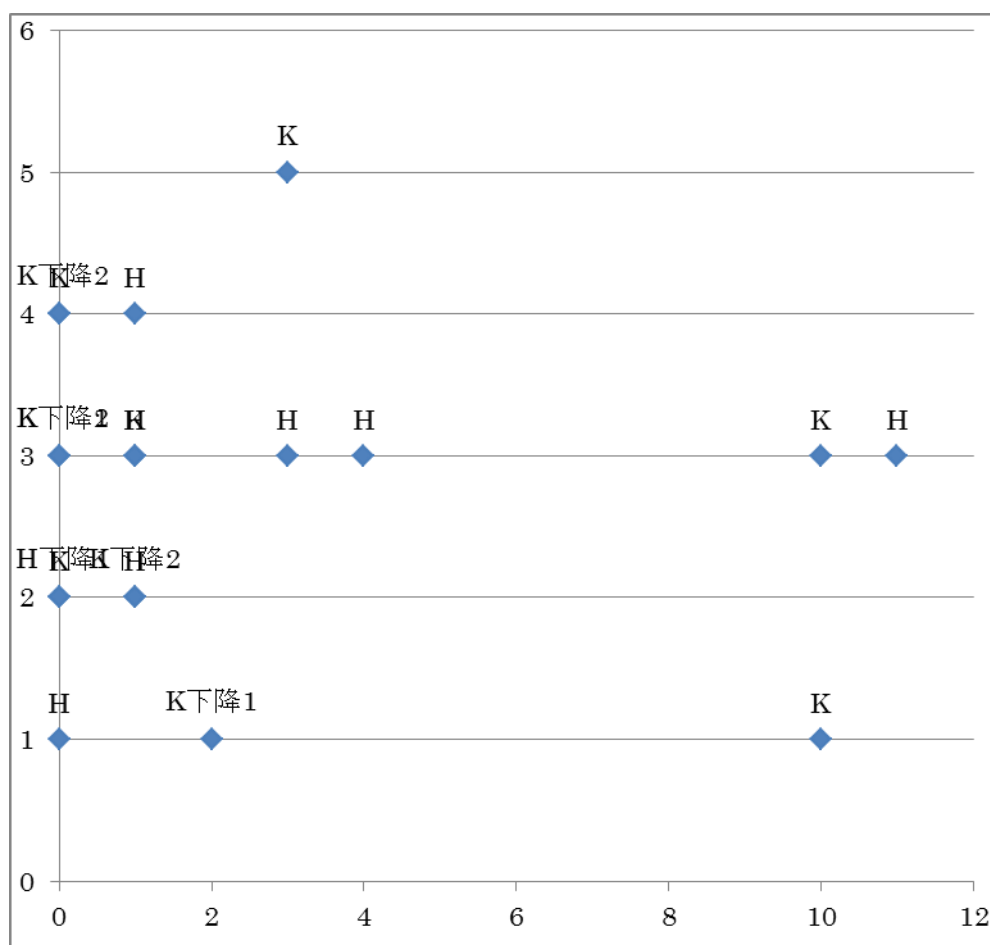
英語プレゼンテーションを終了したのち、それに対する自己評価と学生相互の評価をクロス集計して示したのが図 6 である。図 6 の縦軸には、英語プレゼンテーションに対する自己評価の 5 段階評価を示した。これは、「本日のプレゼンテーションはうまくいきましたか」という質問に対して、「予想以上にうまくいった」を 5 点、「かなりうまくいった」を 4 点、「ほぼうまくいった」を 3 点、「ややうまくいかなかった」を 2 点、「うまくいかなかった」を 1 点として評点して縦軸のデータとしたものである。

図 6 の他者評価は、「あなたから見て、大変上手にプレゼンテーションをしていた人は誰ですか。3 名の名前をあげて下さい。いない場合には『なし』と記入して下さい」という質問に対して、参加学生が 3 名までの氏名を記入した結果を筆者らが集計したものである。この質問に対して学生苗字を 1 名だけ記入した学生は 2 名、2 名を記入した学生 4 名、3 名の苗字を記入した学生 13 名であった¹⁰。最高評価を得た学生は 11 名から「上手にプレゼンテーションしていた」と評価された。誰からも「上手にプレゼンテーションしていた」とは評価されなかった学生も 7 名いた。

¹⁰ 今回の参加学生の苗字はすべて異なっており、同姓の者はいなかった。

図6 最終プレゼンテーションの自己評価と他者評価

自己評価



他者評価

- (注1) 自己評価は第10回アンケートによる質問「本日のプレゼンテーションはうまくいきましたか」に対して、「うまくいかなかった」を1点、「ややうまくいかなかった」を2点、「ほぼうまくいった」を3点、「かなりうまくいった」を4点、「予想以上にうまくいった」を5点として表示した。
- (注2) 他者評価は第10回アンケートによる質問「あなたから見て、大変上手にプレゼンテーションをしていた人は誰ですか。3名の名前をあげて下さい。いない場合には『なし』と記入して下さい」に対して、回答で記入された人数を集計した。
- (出所) 筆者作成。

以上の結果を図6にまとめたが、11名の他者評価を得て最高評価であった学生は「ほぼうまくいった」(3点)と自己評価した。10名から「上手にプレゼンテーションしていた」と評価された2名の学生は、それぞれ「ほぼうまくいった」(3点)と「うまくいかなかった」(1点)と自己評価した。学生の過半から「上手にプレゼンテーションしていた」と評価された学生はこの3名のみであり、そうした学生の自己評価は「かなりうまくいった」(4点)ないし「予想以上にうまくいった」(5点)ではなかった。他者評価の高い学生3名は自己評価が高くない、という結果が得られた。

**表7 8月12日におこなわれた受入先企業での英語プレゼンテーションに際して
学生がとったノートの枚数**

ノート・テイキングの枚数	回答人数
20 ページ以上	2
10 ページ以上 15 ページ未満	2
7 ページ以上 10 ページ未満	1
4 ページ以上 7 ページ未満	8
2 ページ以上 4 ページ未満	3
1 ページ以上 2 ページ未満	2
1 ページ未満	1
合計回答人数	19

(出所) 第2回アンケートより筆者作成。

このような他者評価の高かった3名について8月12日時点でのノート・テイキングの枚数データ(表7)を確認すると、11人から評価された学生については「2ページ以上4ページ未満」、10人から評価された学生については、それぞれ「4ページ以上7ページ未満」、および「7ページ以上10ページ未満」であった。この時点で10ページ以上のノート・テイキングをしていた学生も4名おり、これらの学生と比較すれば、英語プレゼンテーションの他者評価が高かった学生についても、ノート・テイキングの枚数は多いとは言えない。

図6において「下降」と表示された学生は、「10日間の国際インターンシップののちに英語プレゼンテーションの理解度が低下した学生」である。マレーシア人マネージャーによる英語プレゼンテーションの理解度が10日後に低下していた学生は6名いた(表4および図4参照)が、こうした学生が自ら英語プレゼンテーションを行う立場に立ったときに、どのように他者評価されたのかを図6から読み取ることができる。

理解度が低下した6名についてみると、そのうち1名の学生は、他の学生2名から「上手にプレゼンテーションしていた」と評価されており、もう1名の学生は、他の学生1名から同様に評価されていた。残る4名の学生は誰からも「上手にプレゼンテーションしていた」とは評価されていなかった。すなわち、英語の理解度が10日間のインターンシップ後に低下していた学生6名は、自らが英語プレゼンテーションを行ったときに、他の学生から受けた評価も低かった。

しかしながら、10日間の国際インターンシップに参加して理解度が低下し、かつ、英語プレゼンテーションを行っても他者からの評価が低い6名全員が、必ずしも低い自己評価をしているわけではなかった。6名のうち、1名は自己評価として「かなりうまくいった」(4点)、2名は「ほほううまくいった」(3点)と自己評価していた。すなわち、他者評価は低くとも自己評価は高い、という齟齬の認められた学生が3名いた。残る3名の学生のうち2名は「ややうまくいかなかった」(2点)と自己評価し、1名は「うまくいかなかった」(1点)と自己評価していた。

3.4 受入先企業のマネージャーによる評価

マレーシアの受入先企業において行った最終プレゼンテーションは、同社のマネージャーとスーパーバイザーを含めた18名によって評価された。筆者らは最終プレゼンテーションの前に採点方法を記載したアンケート用紙を配付し、プレゼンテーション終了後に回収した。採点方法としては、A+（A プラス）、A、B、C、D という評価をつける形式と、「このプレゼンテーションがプロのコンサルタントによって行われていた場合、いくらの金銭的価値を持つと思いますか」¹¹という質問に対して金額評価を記入する形式の2つの形式を採用した。

A+（A プラス）、A、B、C、D という評価に対しては、アンケートを集めたのちに筆者らがA+（A プラス）を95点、Aを85点、Bを75点、Cを65点、Dを55点として点数評価して各グループの合計と平均を求めた。金銭的価値については、アンケート用紙に記載された金額から各グループの評価合計と平均金額を求めた。以上の作業の結果を表8に示した。

表8 マネージャー18名の点数評価と金額評価

	点数評価	評価金額
	平均点	平均評価金額 (単位：リンギ)
第1グループ	77.22	1526.47
第2グループ	77.78	1558.82
第3グループ	76.11	2005.88
第4グループ	76.11	2752.94
第5グループ	75.56	1850.00
第6グループ	77.22	1879.41
総平均	76.67	1928.92
標準偏差	0.7857	406.72

(出所) 最終プレゼンテーション時に配付したアンケートより筆者作成。

点数評価をした結果、マネージャーによる点数評価平均は全グループについて76.67点であった。全グループのうち、最高得点となったのは第2グループの77.78点であった。最低得点となったのは第5グループの75.56点であったが、その差は2.22点にすぎなかった。6グループのすべてが75点から78点までの範囲で平均的な評価をされており、評価としてはB評価に該当した。

金額での評価で最高になったのは第4グループであり、マネージャーらの評価金額平均は2752リンギとなった。筆者らは、国際インターンシップ滞在中に、受入先企業の組み立て職場におけるワーカーの初任給は900リンギである、というインタビュー結果を得ていたが、それと比較すると約3カ月分の給与ということになる。最低の評価になったのは第

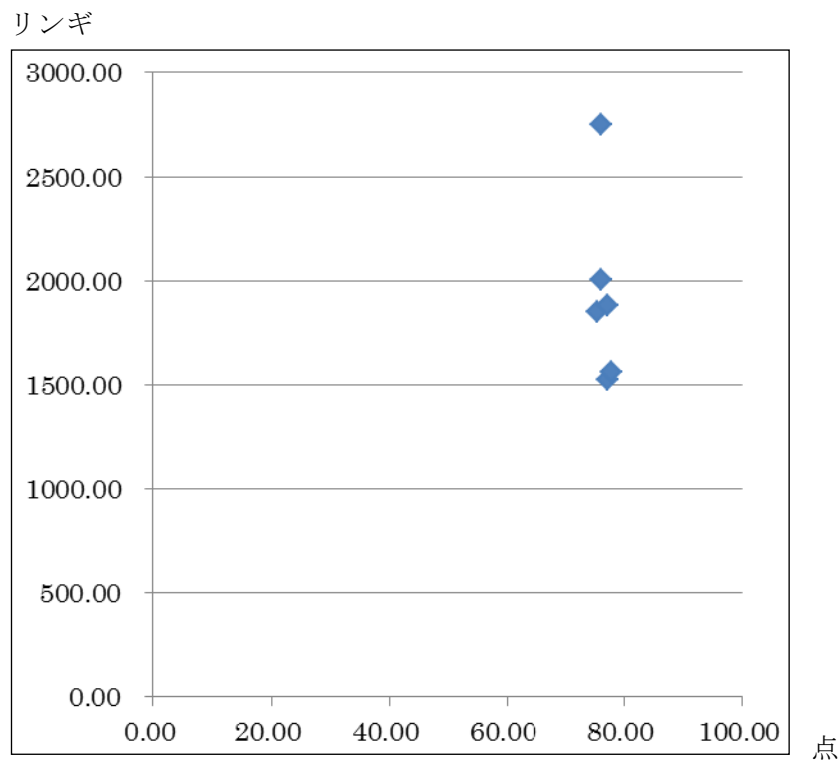
¹¹ マネージャーの評価シートに記載した英文は、“Please assess the value of the presentation if they were given by professional consultants.”であり、その下に、“Group 1: 0 RM, 5 RM, 50 RM, 500 RM, 5000 RM+, Or Specific Amount of _____ RM”として該当金額に○ないしチェックを入れるか、特定の金額評価を記載するものであった。グループ1からグループ6までの記載欄を設けた。

1 グループであり、1526 リンギとなった。第 4 グループとの差は約 1200 リンギであり、ワーカーの初任給 1 カ月分以上の差があった。総平均は 1928 リンギであった。

A+ (A プラス) から D による点数評価と金額評価との関係を示したのが図 7 である。点数評価にはほとんど差がないが、金額評価を行うと 2 倍近い評価の差があることがわかる。また、最高評価および第 2 位の評価を獲得したチームも、点数評価では第 2 グループと第 1 グループおよび第 6 グループ (同率 2 位)、金額評価では第 4 グループと第 3 グループであって、重なり合うことがなかった。点数評価で第 1 位と同率 2 位を獲得した 3 つのチームについて金額評価をみると、最下位および最下位から 2 番目のチームを含んでいることがわかる。

各グループの英語プレゼンテーションは、以下のような内容であった。第 1 グループは、扇風機の高さが調節されないものと 2 段階に調節されるものとがあり、どちらを買いたいと思うかについて受入企業内の従業員からアンケート調査を行った。2 段階に調節されるものを好む人が多いことを前提として、さらに、カメラの三脚 (tripod) を脚とした扇風機の開発を提案した。

図7 受入先企業マネージャーによる点数評価と金額評価の結果



(出所) 筆者作成。

第 2 グループは、受入先企業で製造している非常用ライト (emergency light) のバッテリー継続利用時間が 6 時間であることを確認したのち、手回し発電機と充電用バッテリーを備え、LED ライトによって消費電力量を抑えた非常用ライトの開発を提案した。

第 3 グループは、受入先企業の製品である電気式捕虫器 (insect killer) をデング熱など

の流行しているイスラム圏の国々に拡販する計画をプレゼンした¹²。

第4グループは、受入先企業の倉庫(warehouse)が乱雑である様子を写真を撮って示し、資産管理としての棚卸が重要であることと、そのためにバーコード・リーダーを導入すべきことをプレゼンした。

第5グループは、扇風機の販売にあたって商品が陳列されているだけであって説明が不足していることを8月10日および17日に行った市場調査での写真とともに示し、商品広告のポップ(pop)をつけるべきであることをプレゼンした。

第6グループは、倉庫(warehouse)が乱雑であることと、受入先企業で製造している花をイメージした8枚羽根のフラワー・ファン(flower fan)について、すべてが白い樹脂製である現状の商品から、茎や土をイメージさせる緑や茶色を混ぜた商品の開発を提案した。

採点結果を改めて述べれば、第2グループによる手回し充電式LED非常用ライトの開発提案が点数評価では一番高く、第4グループによる倉庫棚卸のためのバーコード・リーダーの導入が金額評価では一番高いものとなった。

3.5 学生の体調に関する分析

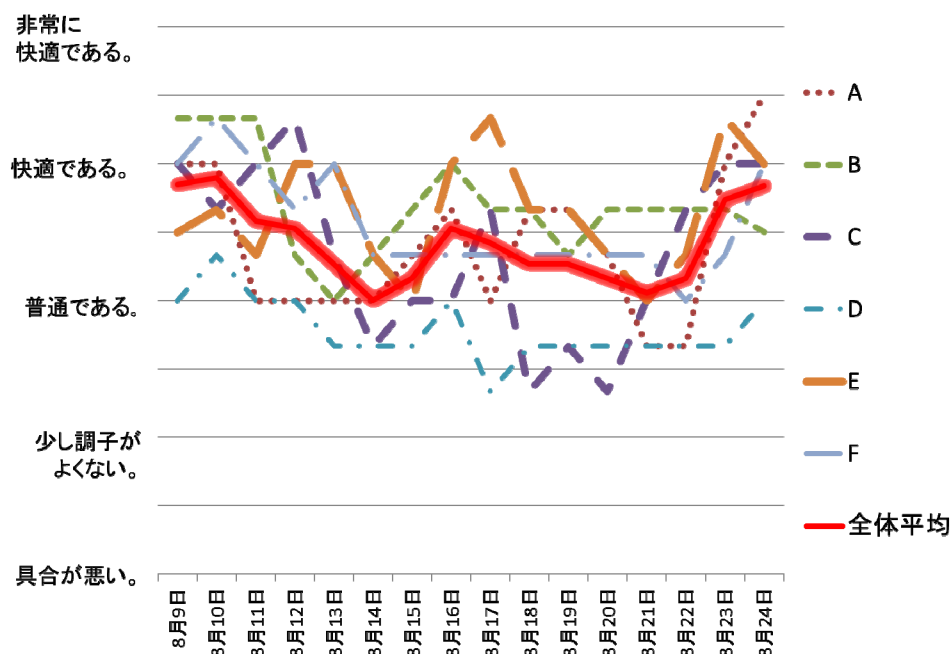
今回のインターンシップ期間中、学生に毎日日誌をつけさせるとともに、その日の体調に関するデータを集計した。それらについて、プレゼンテーションを行ったグループごとにまとめて平均的な傾向を示したのが図8である。8月10日および17日が日曜日であり、週の前半から14日木曜日、21日木曜日に向かって下降していくサイクルが描かれている。

この下降サイクルは金曜日を底として、土曜日には即日回復する。すなわち、8月16日は土曜日であり1日自由行動としたが、その日のうちに体調が回復したことがグラフからわかる。22日金曜日は最終プレゼンテーションの日であり、その前日である21日木曜日には「少し体調がよくない」と感じた学生が増えていったことがわかる。しかし、その翌日、23日土曜日には「快適である」の方向に平均値が急激に変化している。

インターンシップ期間中、病気になった学生はいなかった。図8によってわかるように、参加学生はおおむね「快適」から「普通」と感じていたことが確認できる。「少し体調がよくない」と感じた学生も、週末には元気を取り戻したと理解でき、こうした傾向は筆者らの観察していた学生たちの行動や態度とも一致する。

¹² 受入先企業の電気式捕虫器(insect killer)は、ある程度大きな虫しか捕まえることができないので、現在市販されているものでは、蚊をつかまえることはできない、というコメントが同社のマネージャーたちから指摘された。

図8 体調の推移とそのグループごとの平均



(注) 図のなかの A は第 1 グループ、B は第 2 グループ、C は第 3 グループ、D は第 4 グループ、E は第 5 グループ、F は第 6 グループを指す。

(出所) アンケート調査より筆者作成。

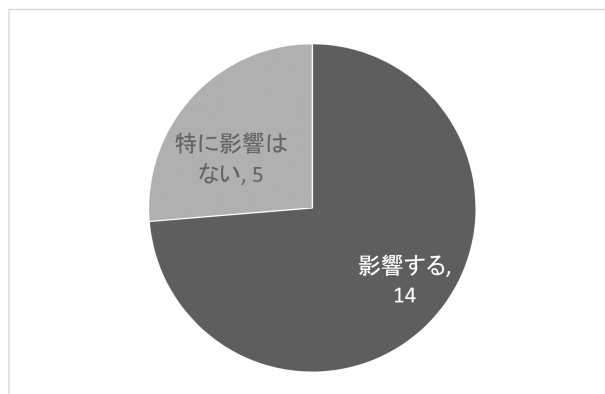
3.6 インターンシップの価値

今回のインターンシップに参加した学生がどのような価値を、どの程度見出しているのかを判断するため、次の 3 つの設問をアンケートで尋ねた。第一は、就職活動への影響である。今回のインターンシップによって卒業後の進路への影響があるかどうかを尋ねた。第二は、英語学習への意欲である。その点を把握するために、インターンシップ終了後の 8 月 28 日、第 12 回目のアンケートを行い、英語を継続して勉強しているかどうか、という質問を行った。第三は、保護者との関係である。具体的には、学生と保護者との会話の時間と内容について質問した。今回のインターンシップは、科学研究費補助金に基づく研究調査であるため、筆者らは、事前に保護者に宛てた文書によって調査目的と国際インターンシップの概要を説明し、保護者からも学生参加への承諾を得ている。したがって、学生からは、国際インターンシップ終了後に何らかの形で保護者への報告や会話が行われることになると思われた。その内容と時間の程度によって学生と保護者との関係性や、その変化を推し量ることができるかもしれないと考えたために 8 月 28 日、第 12 回目のアンケートにおいてこの質問を加えた。

第一の設問である就職活動への影響については多くの学生が肯定的な回答を寄せている(図 9)。回答した学生のなかには、上述したように就職活動を終えた 4 年生が 3 名含まれており、すでになんらかの形で内定を得ていた。したがって、残る 16 名の 2 年生、3 年生のうち 14 名 (87.5%) が、自らの就職活動になんらかの影響があるだろうと回答している。どのような影響があるかについての記述式回答結果は本稿末の付表 3 にまとめたが、

異文化でのコミュニケーション能力向上、英語の大切さを理解したこと、国際インターンシップの体験が就職面接に役立つであろうという推測などを述べた意見があった。

図9 国際インターンシップの就職活動への影響



(注) 質問は、「今回の国際インターンシップは、上記において希望する業種での就職活動にどのような影響を持つと思いますか」であり、二択の選択肢が与えられている。この設問の前に将来希望する就職業種を尋ねている。

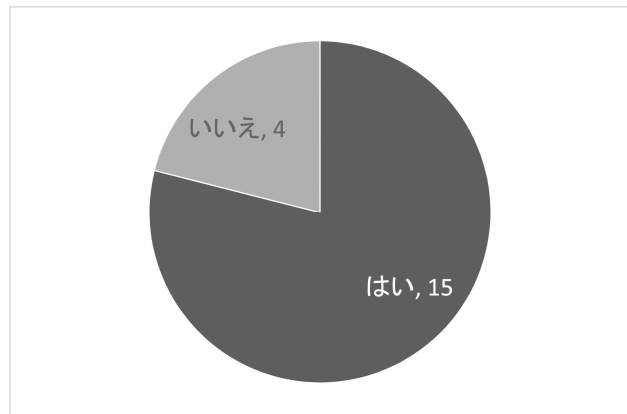
(出所) 第8回アンケートより筆者作成。

第二の設問である英語学習の継続については、19名中15名(78.9%)の学生がなんらかの形で英語の学習を継続していると回答している(図10)。上述したように、この設問は国際インターンシップを終了したのち、5日間を経た8月28日にインターネットによって第12回のアンケートを呼びかけたものであるため、数か月、あるいは、数年を経た再調査によって学習の継続を確認するべきかもしれない。

第三の設問である保護者との会話の有無については、図11に回答結果をまとめた。5分以下の会話しかなかった、あるいは、話をしていない、と回答した学生が11名であり過半数を占めた。30分程度保護者と話をした学生が2名、1時間以上は1名であって、わずか3名にすぎない。2週間の間に起った様々なできごとや学生の経験した内容は、過半数の保護者には伝達されていないものと推定される。図12には、その会話がふだんよりも濃密なものであったかを尋ねたものであるが、「ふだんとかわらない」、という回答が9割近くを占めた。

今回の国際インターンシップは稠密な日程が企画されており(付表2参照)、それらの日程を正確にこなしたと言えるが、多くの学生にとっては、ことさら保護者に説明するほどの大きな出来事ではなかったのかもしれない。回答結果は家族内の関係性にも依存しているが、国際インターンシップが学生と保護者との会話に与える影響度合いはそれほど高くないというべきであろう。

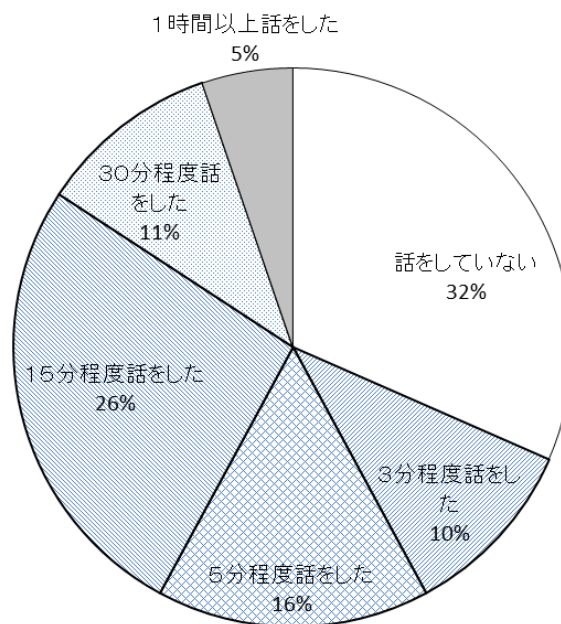
図10 「インターンシップ終了後、英語を継続して勉強しているか」という設問への回答結果



(注) 質問は、「あなたは、8月23日ないし24日に国際インターンシップが終了してからのち、毎日、英語の勉強を続けていますか」というものであった。マレーシア滞在の学生は国際インターンシップ終了日が23日であり、日本に帰国した学生は24日が終了日であった。

(出所) 第12回アンケートより筆者作成。

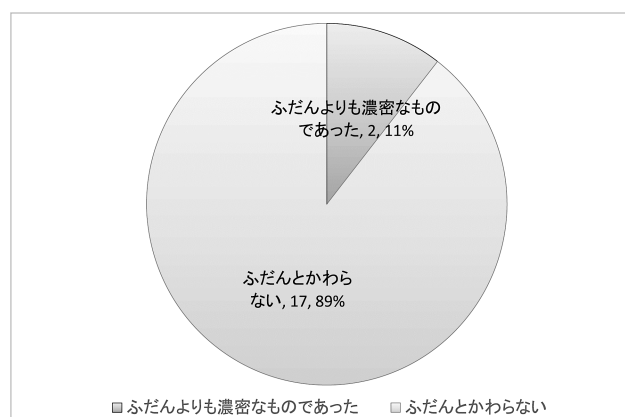
図11 学生による保護者へのインターンシップ経験に関する説明



(注) 質問は、「あなたは、国際インターンシップの内容について、父親ないし母親など保護者に話をしましたか。以下を選択してください」であり、回答欄に6つの選択肢を設けた。

(出所) 第12回アンケートより筆者作成。

図12 保護者との会話レベル



(注) 質問は、「保護者の方々とみなさんとの国際インターンシップをめぐる会話は、ふだんよりも濃密なものでしたか。以下から選択してください」というものであり、二択の選択肢を設けた。

(出所) 第12回アンケートより筆者作成。

4. 結論と含意

本稿は2週間の国際インターンシップと英語教育との関係をデータによって跡づけたものである。主要な事実発見とその含意は以下のようなものである。

第一に、いわば、パワーポイント依存症ともいえるべき学習態度が蔓延していることが明らかになった。5時間の英語プレゼンテーションを聞いていた間に学生がとったノートのページ数が10ページに満たない学生が19名中15名であった(表7)。英語プレゼンテーションは、パワーポイントを利用して行われることが多いが、パワーポイントの文言に注意をひきつけられるために学生はノートをとるという行動をとらなくなり、さらには、それが理解度の低下につながっているのではないかと推定される。スマートフォンを使ってパワーポイント・スライドを撮影するという行為は、今回の国際インターンシップ中さかんに観察されたが、これは自分自身の理解をスマートフォンに託すような「擬人化効果」であったとみることもできる。スマートフォンに記録しておくことで一定の安心感を得るが、それは理解度の向上にはつながらない。

大学では英語でのノート・テイキングについて、その技法を教える必要がある。中学校、高等学校の英語の授業では、教師が黒板に書いた内容を「写す」作業はしつけられるが、教師が喋っている内容をノートにとる習慣は形成されていない。英語を耳で聞きとって、聞き取った音をノートに書き留めるという訓練がないと、自分自身の理解度についての誤解を招くことになる。つまり、英語でノートをとる能力のない学生が、「自分はおおよその理解ができた」と自己認識してしまうことになる。相手が喋っている内容をノートに取ることでできない理解水準では、しばらく時間をおいたのちに、自分自身が何を理解したのかについてノートを確認しながら記憶に定着させることもできない。そうした学生は、プレゼンテーション内容を記憶できないまま、その場に座っていたことのみを重視し、理解していたと錯覚していたことが推定される。その場合、当然のこととして、プレゼンテーション内容を他者に説明する能力も形成されないことになる。

第二に、2週間程度の時間があれば、海外滞在経験の短い学生に15分程度の英語プレゼンテーションを行わせることが可能であることが明らかになった。10日間程度の短期国際

インターンシップの場合、初期に英語理解度が低いと自己認識をしている学生は、後半に理解度が増したと自己認識する。たとえば、8月11日および12日の英語の理解度が低いグループでは、8月20日に至って理解度が上がる傾向にあった（表4）。また、大多数の学生が国際インターンシップ終了後にも英語の学習を継続している（図10）。外国での滞在経験の短い学生にも英語プレゼンテーションの準備をさせて一定の評価を得ることができたのであり、そうした経験を通じて英語力の向上が期待できる。すなわち、初期の理解水準が低い学生グループにおいて、学習へのモチベーションが上がったことが推測される。国際インターンシップは、短期であっても、一定の学生層に対して効果を持つと推定される。そうであるとすれば、むしろ重要なのは、国際インターンシップを企画する教員の側の能力とネットワークの形成にあると言えよう。

第三に、国際インターンシップは万能薬ではない。すでに第一の事実発見で述べたように、①10日間の国際インターンシップののちに英語理解度が低下し、②英語プレゼンテーションにおいて他の学生の誰からも高い評価を受けておらず、そのような評価を受けながらも、③英語プレゼンテーションの自己評価は「かなりうまくいった」ないし「ほほううまくいった」と評価している学生も存在した（図6）。簡略化して表現すれば、①理解度低下、②英語プレゼンテーションについては誰からも高評価を得ることはなく、しかし、③自己評価は満足水準、という組み合わせを満たしていることになる。

こうした学生は、マレーシア人マネージャーによる英語プレゼンテーションについてのノート・テイキングも十分ではなく、「自分は理解できていない」という自己評価を下すまでに10日程度の時間がかかっている。さらに、自分自身がうまいプレゼンテーションをしていないことを自己認識できていない。すなわち、国際インターンシップを企画して、英語によるプレゼンテーション能力の向上を目指す教員側にとっては徒労感を与える学生も、少数ではあるが存在することになる。

第四に、本研究の結果から、教育における評価方法を変更する必要があるかもしれない、という重要な論点が示唆される。本研究において試みたように、英語プレゼンテーションといった創造性を養う課題について、A+（A プラス）からD という点数評価をすることには、大きな危険がある。どれほど優れた提案であっても評価の最高値はA+（A プラス）を超えることはない。かりに、多数の評価者がいた場合には、A+（A プラス）の評価が別の評価者によるC ないしD といった評価で相殺されて、結果的にB 評価という平凡な結果に落ち着く可能性も高い。本研究では上限のない評価方法として金額評価を利用したが、一般的な教育の現場においても個別の学生に対して上限のない評価点数を採用すべき専門分野が存在するかもしれない¹³。

これは、教育における慣習として「なにげなく」利用されている100点満点による評価方法に疑念を抱かせる重大な結果である。100点満点による到達度評価は、一定の限られた学習範囲を前提として、その理解度、記憶力、応用力を測るために用いられる。中間テ

¹³ 支出金額にはコストという制約条件があるが、上限のない採点の場合には、どのような制約条件が与えられるか、という疑問があるかもしれない。そうした疑問に対しては、たとえば、学校単位でポイント制をつくり、体育、音楽、演劇、小説、科学実験、数学などの領域で活躍した学生にポイントを付与する、といった評価方法も考えられる。

スト、期末テスト、大学入学試験などは、すべてそうした範疇に分類される。しかし、例えば、100メートル走で世界記録を樹立したとしても、体育の成績において100点満点を超える評価が与えられるわけではない。様々な課題のなかの一つとしての徒競走に優れた成績評価が行われるだけであって、それは、音楽、演劇、小説といった創造的な活動についても同様である。すなわち、100点満点が存在していることによって学生の才能評価に上限が課せられていることになる。

大学での研究にも、同様の側面がある。優れた研究は100点満点では評価できない。優れた研究者には、教員の求める理解水準である100点をはるかに超えた、輝かしい科学的貢献を行う可能性がある。イノベーションが先導されるのも、こうした100点満点を超えた発想の実現によるものである。日本において大学という制度が普及したのは1880年代以降であるが、いわば19世紀的な成績評価方法が21世紀になっても採用されて続けていることは奇異ですらある。本稿において報告した社会科学的実験結果が示唆するのは、100点満点評価による科目履修という教育方法が機能不全に陥っている可能性である。求められるべきは、才能を伸ばす教育システムの一環としての評価方法である。

これは本稿の問題意識である集合知形成に対しても重要な示唆を与えるものである。A+（A プラス）からDに至る成績評価をした場合、学生たちのプレゼンテーションは、すべて平均してB評価となった。すなわち、平凡な学生を集めた集合知は、平凡な評価結果を得たことになる。しかし、上限のない金額評価を行った場合には、学生たちの提案のなかには、現地ワーカーの3カ月分の給与に匹敵する評価を得たものもあった。平凡な学生による提言が非凡な結果として評価されたことになる。集合知形成の確認のためには、その評価方法をあわせて考察する必要があると思われる。

第五に、国際インターンシップ参加学生の体調管理を行うときに、インターネット・サイトを利用した学生の体調についての自己申告が、きめの細かいサポートにつながることである。本研究では、「非常に快適である」から「具合が悪い」までの五段階と「その他」の選択肢で学生の回答を集計する方式をとったが、今後の課題としては、図8のようなグラフをスマートフォンなどの情報システム上でリアルタイムに学生に示す方法が考えられる。そのことにより、インターンシップのコーディネーションを行う教員や企業に対して学生の体調管理に注意を喚起し、作業量を調節するなど、現場での工夫に活かすことが期待される。

謝辞

本研究は、日本学術振興会、JSPS 科研費 20209258 の助成を受けたものである。

参考文献

- 友野典男（2006）『行動経済学—経済は「感情」で動いている—』光文社新書。
洞口治夫（2009）『集合知の経営—日本企業の知識管理戦略—』文眞堂。

洞口治夫 (2012) 「マレーシア現地企業の工場管理へのアクション・リサーチ—不均衡進化理論による 1999 年調査と 2012 年調査の比較検討— (1)」『経営志林』第 49 巻第 3 号、pp.15-46。

Horaguchi, H. H. 2014. *Collective knowledge management: Foundations of international business in the age of intellectual capitalism*. Edward Elgar.

Mayo, E. 1933. *The human problems of an industrial civilization*. reprinted by Routledge, New York, 2003. (エルトン・メイヨー『産業文明における人間問題』、村本栄一訳、1951 年。)

洞口治夫 (ほらぐち・はるお)
法政大学経営学部教授

児玉靖司 (こだま・やすし)
法政大学経営学部教授

行本勢基 (ゆきもと・せいき)
神奈川大学経営学部准教授

付表1 カンバスを用いて行ったアンケートの実施日と回答日

	アンケート実施日	学生の回答日
第1回アンケート	11 日	8 月 11 日
第2回アンケート	12 日	12 日
第3回アンケート	13 日	13 日
第4回アンケート	14 日を訂正し 16 日に再実施	15 日～18 日
第5回アンケート	17 日	18 日
第6回アンケート	19 日	19 日
第7回アンケート	20 日	20 日
第8回アンケート	21 日	23 日～24 日
第9回アンケート	21 日	23 日～24 日
第10回アンケート	22 日	23 日～24 日
第11回アンケート	24 日	24 日
第12回アンケート	28 日	28 日／29 日

(出所) 筆者作成。

付表2 国際インターンシップの日程

日程(8月)	活動
9日 土曜日	日本からクアラルンプール(KL)への移動。
10日 日曜日	KL到着。クアラルンプールでの市場調査。ホテル到着。
11日 月曜日	10:00am, ホテルでのミーティング。カンバスシステム利用の説明。 13:30pm, シャーアラム日系企業訪問。S 社エアコンディショニング(S Air Conditioning (Malaysia) Sdn Bhd)。
12日 火曜日	8:45-8:55am, マレーシア現地受入先企業シャーアラム事務所(SAO)訪問。社長より経営戦略プレゼンテーション。 9:00am-11:30am, 若手マネージャーからのプレゼンテーション。 13:00pm-16:00pm, 若手マネージャーからのプレゼンテーション。
13日 水曜日	7:30am, ホテル、チェックアウト。 8:00am, マレーシア現地受入先企業SAOの朝礼参加。 9:30am-12:30am, シャーアラム日系企業訪問。P 社シャーアラム第二工場(扇風機生産)。 13:00pm, マレーシア現地受入先企業SAOでの専務取締役よりプレゼンテーション。輸入担当重役よりプレゼンテーション。 16:00pm, バスでスキンチャン村へ移動。ホテル到着。
14日 木曜日	8:30am, 創業者社長とのミーティング。 9:00am, 工場長、工場内マネージャーとのミーティング: 組み立てライン、部品供給エリア、倉庫、射出成型、品質管理・品質保証、製品開発、の各部署のマネージャーからのプレゼンテーション。 13:00pm, 学生が7つの部署でインターンシップ。(3人グループ×5、2人グループ×2) 1.組み立てライン(1)、2.組み立てライン(2)、3.部品供給エリア 4.倉庫、5.射出成型、6.品質管理・品質保証、7.製品開発
15日 金曜日	8:30am-12:00am, 14日木曜日午後のインターンシップ割り当てをローテーション。 13:00pm-17:00pm, 午前の割り当てをローテーション。
16日 土曜日	休日。
17日 日曜日	8:00am, スキンチャン村をバスにて出発。KLにて扇風機、家電商品の市場調査。22:00pm, スキンチャン村ホテルに到着。
18日 月曜日	8:30am-12:00am, 15日金曜日午後のインターンシップ割り当てをローテーション。 13:00pm-17:00pm, 午前の割り当てをローテーション。
19日 火曜日	8:30am-12:00am, 18日月曜日午後のインターンシップ割り当てをローテーション。 13:00pm-17:00pm, 午前の割り当てをローテーション。
20日 水曜日	8:00am-9:00am, 工場の朝礼に参加。 9:30am-12:00am, 人事労務管理マネージャーのプレゼン。 13:00pm-16:00pm, 生産計画担当マネージャーのプレゼン。部品調達マネージャーのプレゼン。出荷・輸出入担当マネージャーのプレゼン。 16:00-21:00pm, 休憩。 21:30pm-23:30pm: 射出成型部門の夜間勤務観察。
21日 木曜日	最終プレゼンテーションのための工場内取材、パワーポイント準備。
22日 金曜日	午前: 最終プレゼンテーション準備。 13:30pm: マネージャーへの学生最終プレゼンテーション。15分発表、10分質疑応答、6チーム。(3人グループ×5、4人グループ×1) 19:00pm: お別れパーティー
23日 土曜日	ホテル・チェックアウト、KL国際空港へ移動。日本への帰国便搭乗。

付表3 第8回アンケートにおける就職活動への影響への回答

-
- 回答 1. 海外という日本とは異なる地でインターンに参加することは、母国語が異なる人とのコミュニケーション能力が重要となるので、サービス業の就職活動の際評価されると考える。
- 回答 2. 今回の研修で東南アジアでの仕事も面白いと感じたから。
- 回答 3. 異人種間のコミュニケーションをとることはとても難しいが、今回積極的にコミュニケーションをとるようにしたので、この経験がよい影響を与えてくれると思う。
- 回答 4. 工場の manager 達のような仕事も楽しそうだったから。
- 回答 5. 製造業を就職活動で調べる際に今回の経験が生きると思うから。
- 回答 6. 工場見学などを通して単に作業内容を理解するだけではなく、周りにたいする思いやりや品格が大事だと気づくことができた。前に比べれば笑顔で積極的に人とコミュニケーションとれるようになった気がする。
- 回答 7. 空港で働きたいので英語でコミュニケーションをとるため。
- 回答 8. 物事に対して深く考えようと思わされた。
- 回答 9. 社内公用語が英語なため。
- 回答 10. プレゼン力や色々な人とのかかわる（営業）すると言う点では重要と言えるだろう。
- 回答 11. サービス業の会社ではなかったが、受入先企業は目に見えるものを使って消費者を満足させるような製品を開発していた。しかし7つの部門のうち、2つの部門間で目に見えない問題を抱えていることに気付いて、その問題を解消するためにグループで話し合いをしたりして、最終的に一つの答えとして発表できたから。
- 回答 12. 英語を使うという面において色々な人の発音を聞くことができた。
- 回答 13. 業種等は違えども、この話を面接ですることによって、興味を持ってくれると思う。
- 回答 14. 製造業というものの良い面、悪い面を知ることができたため。
- 回答 15. 国際インターシップを経験したことによって、自分の意識が変わったと感じる。また海外で活躍している人は派手に仕事をしているというより、地道な作業を着実にこなすことを念頭に仕事をしていることが理解できたため。
- 回答 16. 特に影響はないと回答した。
- 回答 17. 特に影響はないと回答した。
- 回答 18. 特に影響はないと回答した。
- 回答 19. 特に影響はないと回答した。
-

(注1) 「上記質問で「影響する」と回答した人は、その理由を記述して下さい」という設問への回答である。上記質問とは、「今回の国際インターシップは、上記において希望する業種での就職活動にどのような影響を持つと思いますか」という設問であり、それに対して「影響する」と「特に影響はない」の二択から選択するものであった。

(注2) 回答15の学生は、先行する質問で「特に影響はない」と回答したうえで上記のコメントを記載している。また「理解」という漢字は「りかい」とひらがなで入力されていたため、修正した。

(注3) 回答11では受入先となった会社名が記載されていたが、「受入先企業」と表記した。

(出所) 第8回アンケートより筆者作成。